

## 『硝子戸の中』論

——〈時〉をめぐって——

姜 熙 鈴

『硝子戸の中』(大四、一、一三—二、一三三)は漱石晩年の隨筆であり、人間やその生死についての作者の洞察が窺える作品である。

『こゝろ』と『道草』の間に位置するこの作品は、病後の作者と「廣い世間とを隔離」する硝子戸を間にして、作者の身辺に起こったことや、過去の回想を通じての作者の深い認識が見られ、横には自己を取り巻く現実や人間的な繋がりが、縦には過去を引きずり、尚生きたつある「繼續中」(三十一)の自己の生を見つめる作者の静かであり、深い試みを感じられる。この試みには「繼續中」の人間の生に、時間や空間がどのように関わってくるかという作者の問題意識が示されている。中でも特に、作品の全般にわたって、「時」(八)若しくは時間の持つ力が人間に及ぼす背反する作用についてのエピソードが多く見られる。

ここでは、〈時〉や時間に関するエピソードから作者の過去に対する考えを検討し、過去の記憶に対して繰り返し「夢」(三)という表現を用いていることと、作品後半の「微笑」(二十三)との関

連性を探る。さらに、この「微笑」と作品を綴る作者の姿勢との密接な関係から浮かび上がる以後の作品との関わりも考えて行きたい。

### 二

『硝子戸の中』は、『文鳥』や『永日小品』や『思ひ出す事など』と同じく、全集では『小品集』に収められている。漱石の小品群は形式にこだわらない自由な筆致で描かれ、中でも『永日小品』が幻想と現実を往来し、隨筆とも短編小説ともいえる連作が続くのに対して、『思ひ出す事など』や『硝子戸の中』は創作性の希薄な隨筆と呼ぶべきものであり、隨筆ならでは、作者の率直な心情が語られている。が、『硝子戸の中』の書き方の特徴として、隨筆でありながら「書き手と語り手と作中の主人公という存在の次元の異なる三人の〈私〉」(註一)を持つことが上げられる。この点は、この作品を小説以上の深さと幅の広さを持たせている重要な要因といえるが、もう一つの要因として、「現から幻へと、時の流れを腕の中で移動させて、またさりげなく現へと目覚めてまいもどる」(註二)

といった方法を取った構成の面でのことが上げられる。また、構成の面に於てのこのような方法は「現在から過去へ、過去から現在への振り子運動のうちに、現実の苦渋を浄化し、中和し、且つまた相対化せんとする」(註3)作者の試みを窺わせる。作者は現在の「硝子戸の中」にその視点を置き、思索は自由に過去との間を往復し、記憶の中から過去を再現することによって、過去及び、自己の「繼續中」の生を相対化している。即ち、人間の生を構築している縦の軸としての時間と横の軸としての空間といった二つの要素を含む複眼的な認識をもって、作者は自己を取り巻く現実や過去を相対化しているのである。この縦の軸である時間は、現在を起点として、プロローグの一章とエピソードの三十九章を除く残りの章の流れを成す重要なモチーフとして、その意味は極めて大きい。

まず、プロローグの一章では、騒然とした社会情勢の中で多忙な人達の「輕蔑を冒して」、「自分以外にあまり関係のない話らぬ事を書く」という作者の前置きがある。続く二章では、「卯年の正月號だから卯年の人の顔を並べたい」というある雑誌社の依頼で、取った写真の話である。その写真が「何うしても手を入れて笑つてゐるやうに拵えたもの」としか見えなかつた」ことに触れて、「生れてから今日迄に、人の前で笑ひたくもないのに笑つて見せた」偽りが、「寫真師のために復讐を受けた」というこのエピソードは、さりげない内容でありながら、その意味するところは深く、自己を内省する作者の鋭い視線が感じられる。

苦い笑いを含んだ二章の内容とは対照的に、三章から五章までのヘクトーという犬の話では、命あるものの死と、それを無化して行

く(時)の流れとが、哀愁感を漂わせつつ、静かなトーンとして描かれる。そこには、小さな生き物に対する作者のやさしい眼差しが感じられる。この犬を日さんからもらったのはもう三・四年前のことだが風呂敷に包まれて来たその夜の様子を、次のように綴る。

彼は暗い所にたつた獨り寐るのが淋しかつたのだらう。翌る朝迄まんじりともしない様子であつた。

此不安は次の晩もつゞいた。其次の晩もつゞいた。私は一週間餘りか、つて、彼が與へられた藁の上に漸く安らかに眠るやうになる迄、彼の事が夜になると必ず氣に掛つた。

### (三)、傍点は原文)

しかし、時間が経つにつれて、「次第に宅のものから元程珍重されないやうに」(二)なり、最後はある家の池で水死するという悲惨な結末となる。漱石はヘクトーの墓標に「秋風の聞えぬ土に埋めてやりぬ」という一句を書き、次のような感想を抱く。

もう薄黒く朽ち掛けた猫のに比べると、ヘクトーのはまだ生々しく光つてゐる。然し間もなく二つとも同じ色に古びて、同じく人の眼に付かなくなるだらう。

### (五)、傍点は引用者、以下特別断りのない限り引用者とす)

作者のベシミズムや無情感を窺わせる箇所であるが、それと同時に(時)の持つ威力と公平さを語っている。このような(時)の持つ不可抗力的な面は、しかし逆にまた人間の生を維持させる皮肉な面を持つている。作中には、この二つのあい反する面が交差しながら、描かれている。六章から八章までの悲劇的な恋愛がその元となる「悲痛を極めた」(七)ある女の告白は、ヘクトーの話とは逆に、

人間の生に影響を及ぼす(時)の持つ皮肉な面を感じさせる挿話である。その女は

「私は今持つてゐる此美しい心持が、時間といふものの、為に段々薄れて行くのが怖くつて堪らないのです。此記憶が消えてしまつて、たゞ漫然と魂の抜殻のやうに生きてゐる未來を想像すると、それが苦痛で苦痛で恐ろしくつて堪らないのです」

(七)

と言う。(私)は「今廣い世間の中にたつた一人立つて、一寸も身動きの出来ない位置にある」その女に同情しながらも、「手の付けやうのない人の苦痛を傍観する」(七) ほかはないと言う。ただ、「其夜却つて人間らしい好い心持を久し振に経験し」「それが尊とい文藝上の作物を讀んだあとの氣分と同じもの」で「有樂座や帝劇へ行つて得意になつてゐた自分の過去の影法師が何となく淺ましく感ぜられた」(七) という。ここに我々は作家漱石の深い共感を讀むことが出来る。また、このような感情は九章で友人Oに會つた時に味わたつた「透明な好い心持」ともあい通ずるものがあり、これを漱石は『思ひ出す事など』の中で、次のように語っている。

子供と違つて大人は、なまじい一つの物を十筋二十筋の文から出來た様に見窮める力があるから、生活の基礎となるべき純潔な感情を恣のままに吸収する場合が極めて少ない。——中略——たとひ純潔でなくても、自分に活力を添へた當時の此感情を、余は其儘長く余の心臓の眞中に保存したいと願つてゐる。さうして此感情が遠からず單に一片の記憶と變化して仕舞さうなのを切に恐れてゐる。

『硝子戸の中』論 — (時) をめぐつて —

(二十三)

純粋な感情を大切な記憶としていつまでも持ち続けたい漱石の願いが、よく表れている箇所であるが、このような考えを持つていた漱石が、にも拘らず、その女に与えた助言は「凡てを癒す(時)の流れに従つて下れ」(八) という凡庸なものであつた。

(私)は

公平な「時」は大事な寶物を彼女の手から奪ふ代わりに、其傷口も次第に療治して呉れるのである。烈しい生の歡喜を夢のやうに疊してしまふと同時に、今の歡喜に伴なふ生々しい苦痛も取り除ける手段を怠たらないのである。

(八)

と言う。しかし、このような助言を与える(私)の言葉には、苦いあるものが沈澱している。

斯くして常に生よりも死を尊いと信じてゐる私の希望と助言は、遂に此不愉快に充ちた生といふものを超越する事が出来なかつた。しかも私にはそれが實行上に於ける自分を、凡庸な自然主義者として証據立てたやうに見えてならなかつた。私は今でも半信半疑の眼で凝と自分の心を眺めてゐる。

(八)

とは、このエピソードを締め括る作者の苦い考察である。「烈しい生の歡喜」が(時)によつて風化され、「單に一片の記憶と變化して仕舞さうなのを切に恐れてゐる」(私)にとつて、この助言は彼自身にとつても苦々しい生の実感や重みとして伝わってきたに違ひ

ない。佐藤泰正氏も「死への諦観も決意もまた超えることの出来ぬ、生をしたたかな重さが彼の前に引き据えられる」(註4)と指摘する。この「半信半疑の眼で凝と自分の心を眺める」(私)の思念は、十章にも続けられる。高等学校時代の友人Oが上京して久しぶりに会った時、(私)は「恐ろしい『時』の威力に抵抗して、再び故の姿に返る事は、二人に取つてもう不可能であつた。二人は別れてから今會ふ迄の間に挟まつてゐる過去といふ不思議なものを顧みない譯に行かなかつた」という感想を抱かざるを得ない。長い年月に風化された互いの変貌ぶりから、(私)の思索は「過去といふ不思議なもの」を凝視する。この「過去といふ不思議なもの」への凝視は、作者漱石を否応無しに過去の世界に引き戻し、そこから過去の累積である自己の生というものが問い返される。これが言わば、この随筆の縦の構図だと考えられる。

こうして、過去への作者の思索は螺旋状になつて中心に向かつて動くが、時に過去への入口で、動きを止め、作者をめぐる横の関係へと転回してゆく。十一章では原稿を書いて批評を請う女性に対して、「思い切つて正直にならなければ駄目」だということを、また、十二、十三章では、漱石を不愉快にした「播州の坂越にある岩崎といふ人」(十二)のことを、十四章では昔漱石の家に入った泥棒の話を、時に真率に、また時にユーモラスに綴っている。さらに、続く十五章では、學習院の講演で貰つた謝礼をめぐる、「自分の職業以外の事に掛けては、成るべく好意的に人の為に働いてやりたい」と言い、「其好意が先方に通じるのが、私に取つては何よりも尊と報酬」で「金などを受け取ると」「其貴重な餘地を腐食させられ

たやうな心持」になるといふ作者自身の努力の報酬としての金銭に対する潔癖な迄の考えが述べられる。

さて、十六章に至つて作者の筆致は再び過去の入口に立ち、床屋の亭主と話をした内容が綴られる。互いの話の中で、床屋の亭主を鼻屑にしてくれた「高田の旦那」も、(私)が十七・八の頃、芸者屋の東家でトランプをした「御作」といふ芸者も、既に亡くなつてゐることを知り、「歸つて硝子戸の中に坐り、「まだ死なずに居るのは、自分とあの床屋の亭主丈のやうな氣がした」(十七)といふ。(時)の流れに添うようにして周囲の人間が死んで行く中で、なお生き続けている自分というものを見詰める(私)の、静かな、また苦い認識と言えよう。

続く十八章では、また現在にもどり、「心の中心と折合が付かない」といふ女性に対しては、「失禮ながら貴方の年齢や教育や學問で、さうきちんと片付けられる譯」がない。「學問の力を借りずに、徹底的にどさりと納まりを付けたいなら、私の様なもの、所へ來ても駄目」だ。「坊さんの所へでもいらつしやい」と言う。さりげなく且つ、ユーモラスに語られる話ではあるが、(私)に向かつて言う女性の「先生の心はさういふ點で、普通の人以上に整つてゐらつしやるやうに思ひました」といふ言葉を、漱石は常々の彼自身の精神状況や体の具合とを照らし合せて、一種アイロニカルな調子で描いている。

こうして、次の十九章からは作者漱石の記憶を辿るものが主となつてゐるが、その筆はしばしば現在に戻り、自分とその身辺のこととを語る。

例えば、二十二章の人間の寿命のことであるが、この章は現在のことでありながら、人間の生死の理不尽さを語る点で、十六・七章と呼応する。「此三年來」「大低年に一度位の割で病氣をする」(私)が、ようやく回復すると、「黒樫のついた摺物が、時々私の机の上に載せられ」「運命を苦笑する人の如く、絹帽などを被つて、葬式の供に立つ、俣を驅つて齋場へ駆けつける」という。が、このことによつて、「多病な私は何故生き残つて」「あの人は何ういふ譯で私より先に死んだのだらう」ということを考えざるを得ない。ここでも、「自分の生きてゐる方が不自然」で、「運命がわざと私を愚弄するのではないかしら」というアイロニカルな認識と、我々を見えない力で支配する運命に対する深い畏怖とが語られる。また、二十五章の若くして亡くなつた大塚楠緒子の死、また二十八章の猫の話でも根底に流れるのは、このような認識であると言えよう。そして、このような漱石の現在に対する認識と、回想される過去とは微妙に交差しながら重なつて来るのである。

### 三

さて、漱石の幼年時を語る「回想の筆は、まことにわびしい。例えば、「私の家に關する私の記憶は惣じて斯ういふ風に鄙ひてゐ」て、「何處かに薄ら寒い憐れな影を宿してゐる」(二十一)という(私)の孤独な幼年時代の心的風景は、「ことに霧の多い秋から木枯の吹く冬に掛けて、かん／＼と鳴る西閉寺の鉦の音は、何時でも私の心に悲しくて冷たい或物を叩き込むやうに小さい私の氣分を寒くした」(十九)というところにも端的に表れている。また、生まれた

『硝子戸の中』論 — (時) をめぐつて —

所である菊久井町あたりの旧宅を見て、「茫然として佇立し」「何故私の家丈が過去の殘骸の如くに存在してゐるのだらう」「早くそれが崩れて仕舞へば好いの」(二十三)と思うのも、不幸だつた幼年時代が、限りなく否定的な要素として心に沈澱していることをあらわす。こうして、「時」は力であつた(同)と言ひ、「去年私が高田の方へ散歩した序に、何氣なく其所を通り過ぎると、私の家は綺麗に取り壊されて、其あとに新しい下宿屋が建てられつ、あつた」という。(私)はすべてを無化してやまぬ時間の魔力の前に茫として佇むかに見える。

が、「時」の流れが変えたのは、このような外觀や風景丈ではなく、エッセイを書く作者漱石の心中にも確実にその変化は見られる。その確実な変化と密接な関わりを持つのが、過去の記憶に關して、「夢」(三二)という表現を用いてゐることである。

例えば、

「何だか夢のやうな心持もする」(三二)

「烈しい生の歡喜を夢のやうに暈してしまふ」(八)

「向ひ合つて座を占めた〇と私とは、何よりも先に互の顔を見返して、其所にまだ昔の儘の面影が、懐かしい夢の記念のやうに残つてゐるのを認めた」(十)

「此豆腐屋の隣に寄席が一軒あつたのを、私は夢幻のやうにまだ覚えてゐる。こんな場末に人寄場のあらう筈がないといふのが、私の記憶に霞を掛ける所為だらう、私はそれを思ひ出すたびに、奇異な感じに打たれながら、不思議さうな眼を見張つて、遠い私の過去を振り返るのが常である」(二十)

「そんな派手な暮しをした昔もあつたのかと思ふと、私は愈夢のやうな心持になるより外はない」(二十一)

「其外の事になると、私の母はすべて私に取つて夢である」(三十八)

といった箇所がその例であるが、このことは(私)にとつて過去が一片の「夢のやうな」記憶として存在していることを表している。(時)がもたらしてくれた心の風化作用ともいえるが、逆に、このことによつて、ようやく過去というものが作者漱石の内部で過去の記憶として距離感を持ち、過去というものの相対化を可能にしたということも、また否めまい。特に作者の家や父親に関する記憶の再現には、このような傾向は明らかである。

例えば、菊久井町という名の由来について、「父は名主がなくなつてから、一時區長といふ役を勤めてゐたので、或はそんな自由も利いたかも知れないが、それを誇りにした彼の虚榮心を、今になつて考へて見ると、厭な心持は疾くに消え去つて、只微笑したくなる丈である」(二十三)と語り、二十九章では

私は両親の晩年になつて出来た所謂末ッ子である。——中略——私は普通の末ッ子のやうに決して両親から可愛がられなかつた。是は私の性質が素直でなかつた為だの、久しく両親に遠ざかつてゐた為だの、色々の原因から來てゐた。とくに父からは寧ろ苛酷に取扱かはれたといふ記憶がまだ私の頭に残つてゐる。

と語る。この二箇所を比較すれば、(私)の「微笑」とは「厭な心持」や暗い「記憶」をも「公平な「時」」はそれらを量し、無化してし

まうという深い体感に裏づけられているとも言えよう。また、逆に「公平な「時」」は大事な「記憶」も、葬つてしまい、(私)が「母の記念の爲に此所で何か書いて置きたい」(三十七)と思うのも、葬られてしまう「記憶」を心の核心に留めて置きたいという切なる願ひからでもあろう。「母の名は千枝」で「決して外の女の名前であつてはならない様な気がする」(同)という(私)の思ひは深い。悪戯で強情な私は、決して世間の末ッ子のやうに母から甘く取扱かはれなかつた。それでも宅中で一番私を可愛がつて呉れたものは母だといふ強い親しみの心が、母に對する私の記憶の中には、何時でも籠つてゐる。——中略——

「御母さんは何にも云はないけれども、何處かに怖いところがある」

私は母を評した兄の此言葉を、暗い遠くの方から明らかに引張出してくる事が今でも出来る。然しそれは水に融けて流れかゝつた字體を、屹となつて漸と元の形に返したやうな際どい私の記憶の断片に過ぎない。其外の事になると、私の母はすべて私に取つて夢である。途切れ途切れに残つてゐる彼女の面影をいくら丹念に拾ひ集めても、母の全體はとても髣髴する譯に行かない。其途切れに残つてゐる昔さへ、半ば以上はもう薄れ過ぎて、しつかりとは掴めない。(三十八)

このような(私)の切なる願ひも、人間に取捨選択の余地を許さない「公平な「時」」によつて、すべて残らず、無化される。しかし、ここでの作者漱石の感慨は決して生への諦念や無常感からのみ発したものである。寧ろ「人の心の奥」に潜んでいる「繼續中」(三十三)

のものを抱きながら、依然として「生に執着し」(八) つづける人間存在の矛盾そのものが語られている。

(私)は、

所詮我々は自分で夢の間に製造した爆裂弾を、思ひ／＼に抱きながら、一人残らず、死といふ遠い所へ、談笑しつゝ歩いて行くのではなからうか。唯どんなものを抱いてゐるのか、他も知らず自分も知らないで、仕合せなんだらう。

(三十三)

と言ひ、「繼續といふ言葉を解しない一般の人を、私は却つて羨ましく思つてゐる」という。人間がその生の内実に潜む「繼續中」のものを知らずに死に向かつて「談笑しつゝ、行」けるのは、生そのものに対する人間の盲目性にほかならない。そのような人間の無知と盲目性を前提とするならば、次のような箇所はもつとも人間的な(人間的次元を超えぬものという意味である)祈りであらう。

もし世の中に全知全能の神があるならば、私は其神の前に跪づいて、私に毫髪ひよまつの疑うたがひを挟む餘地もない程明らかな直覺を與へて、私を此苦悶から解脱せしめん事を祈る。でなければ、此不明な私の前に出て來る凡ての人を、玲瓏透徹な正直ものに変化して、私と其人との魂がびたりと合ふやうな幸福を授け給はん事を祈る。

(三十三)

ここに登場する「神」はしばしば論議になる箇所であるが、佐藤泰正氏はこの文体には「埋めがたく深い距離感が、まざれもなく示されている」と言ひ、「神」は彼の矛盾をそのままに、全的につ

『硝子戸の中』論 — 〈時〉をめぐって—

つみ、受け入れる神ではなく、その矛盾を確認し、あかしするもの——言わば彼の苦惱につかえる傍役(虚像)として、登場するにすぎない(註5)と指摘しているが、私も同感するところである。こゝういった意味から「私の罪は、——もしそれを罪と云ひ得るならば——頗ぶる明るい處からばかり寫されてゐた」(三十九)というところともまた呼応し、寧ろ、ここに現れているのは、真に宗教的な次元の神とは性質の異なるものであり、あくまでも人間というものと、人間的なことに拘泥しつづけた漱石の倫理観から求められたものと読むべきであらう。

#### 四

さて、作者漱石の過去への回想は続き、〈時〉の流れによつて変わるものと逆に変わらないものと語る。三十五章で、〈私〉は新當座に行つて馬琴の講釈を聞き、その風貌も語り口も、昔のままの姿に触れ、「廿世紀の此急激な變化を、自分と自分の周囲に恐ろしく意識しつゝ、あつた私は、彼の前に坐りながら、絶えず彼と私とを、心のうちで比較して一種の默想に耽つてゐた」(三十五)という。

ここでは、半ば懐かしさと、また半ば〈時〉が過ぎても依然として変わらぬ存在があることに触れる。この感慨と、続く三十六章の亡くなつた長兄の馴染みであつた女性を語りながら、「時々此女に會つて兄の事などを物語つて見たい氣がしないでもない」が、「其心も其顔同様に皺が寄つて、から／＼に乾いてゐはしまいかとも考へる」というところは、前後して、〈時〉に対する漱石の複眼的認識がよく表れている。

そうして、過去への回想の最後は母千枝の話である。夢の中で「自分の所有でない金銭を多額に消費してしまつて」「大變苦しみ出し」「大きな聲を揚げて下にゐる母を呼んだ」時を、次のように綴る。

—母は私の聲を聞き付けると、すぐ二階へ上つて来て呉れた。

私は其所に立つて私を眺めてゐる母に、私の苦しみを話して、何うかして下さいと頼んだ。母は其時微笑しながら、「心配しないで好いよ。御母さんがいくらでも御金を出して上げるから」と云つて呉れた。私は大變嬉しかつた。それで安心してまたすやく／＼寐てしまつた。

(三十八)

哀切なまでの母への慕情が綴られている章であるが、水谷昭夫氏の言う如く、「描かれている『かすかな影』は、決して直接的に母の実像ではなく、漱石がいだきつづけて来た『母なるもの』の幻像の中によぎつて行く幻」(註6)と見て良い。

また、この母の「微笑」と続く三十九章では、「然し私自身は今其不快の上に跨がつて、一般の人類をひろく見渡しなが微笑してゐるのである。今迄詰らない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、恰もそれが他人であつたかの感を抱きつ、矢張りの微笑してゐるのである」という。この「微笑」とを連関させて、「末尾の眠りへの誘ひ」は「『搖籃の中で眠る子供』とイメージにつながるものであり、さらにこれらは前章の『母の微笑』の下に眠る少年のやすけさにつながる」(註7、傍点は原文)という評者のすぐれた指摘もある。そうして、ここにもまた、複眼的な作家としての漱石があることはいふまでもない。

三十八章までを書き、三十九章を綴る漱石は「何故あんなものを書いたのだらうといふ矛盾が私を嘲弄し始めた」と言いつつ、「自分の馬鹿な性質を、雲の上から見下して笑ひたくなつた私は、自分で自分を輕蔑する氣分に搖られながら、搖籃の中で眠る子供に過ぎなかつた」という。これまで身近のこと、人間觀や過去を語つた〈私〉という存在を、俯瞰する作者の目は、自己と他者、あるいは他者との出来事、自己の過去をも相対化している。

しかし、この作品は隨筆という形式であるだけに、自己、過去、他者に対する相対化の試みには、一つの限界がある。このような限界を含めて、これまで書いた作者漱石の反省とも言うべきものが三十九章で、次のように語られる。

私は今迄の事と私の事をこちゃ／＼に書いた。——中略——それでも私はまだ私に對して全く色氣を取り除き得る程度に達してゐなかつた。嘘を吐いて世間を欺く程の術氣がないにしても、もつと卑しい所、もつと悪い所、もつと面目を失するやうな自分の缺點を、つい發表しずに仕舞つた。——中略——私の罪は、——もしそれを罪と云ひ得るならば、——頗ぶる明るい處からばかり寫されてゐたらう。其所に或人は一種の不快を感ずるかも知れない。

相対化の試みが結果的に、「頗ぶる明るい處からばかり寫されてゐた」ことに対する作者漱石の読者への氣遣いのようなものを感じさせるところであるが、ここでの「一種の不快」は、寧ろ、作者のものとして良い。この作品に於ける相対化の作業や、〈私〉という存在への徹底的な相対化というのが、まだ不十分であることを熟知



している作者の「不快」とも言えるが、続けてこう言う。

然し私自身は今其不快の上に跨がつて、一般の人類をひろく見渡しながらか微笑してゐるのである。今迄話らない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡しして、恰もそれが他人であつたかの感を抱きつゝ、矢張り微笑してゐるのである。

この「不快」を、さらに「微笑」が包み、すべてを包容して行く。しかし、この〈語り手〉としての〈私〉の背後には、さらに〈書き手〉としての作家漱石がいる。「もつと卑しい所」「もつと悪い所」「もつと面目を失するやうな自分の缺點を」とは、この背後の〈書き手〉の声でもある。続く『道草』への転回は、その一つの揺り戻しともいえよう。

『道草』は、自伝的な素材を題材としながらも、すべてを俯瞰する作者の眼は冷酷なまでに厳しい。

『道草』における、自己の生の内実に迫ろうとする作者の試みとは、「凡てが頹廢の影であり凋落の色であるうちに、血と肉と歴史とで結び付けられた自分」(二十四)を発見する、その果敢な実験ともいえよう。『硝子戸の中』では、過去というものが、重い因果をもつて、迫つて来ることも、したたかな他者との終わりのない戦いもない。作者は『道草』において、初めて過去は重苦しい生きた過去として、他者は生身の人間・同士の関わりとして、描くことに成功した。健三の「御前は必竟何をしに世の中に生れて来たのだ」(九十七)という自問の声は、過去の延長線にある現在の自己の生は何かという課題に対する問いでもある。『硝子戸の中』の〈私〉の瞑想が「何時迄坐つてゐても結晶しなかつた」(三十九)ように、いつまでも「片

『硝子戸の中』論 — 〈時〉をめぐつて—

付かない」(『道草』百二)生への問い。しかし、そこにはありのままの生をトータルに、受容し、また問い続けようとする作家の誠実な姿勢が見られる。『硝子戸の中』は、その飽くなき追求への一里程ともいふべきものであろう。

### 〔註〕

註1 「硝子戸の中」校訂と解明」・岡三郎『夏目漱石研究

第二卷』1986年12月、国文社

註2 「硝子戸の中」の憂愁」・水谷昭夫「講座 夏目漱石」

第三卷〈漱石の作品(下)〉昭和五十六年十一月、有斐閣

註3 「薄ら寒さと春光と——『硝子戸の中』における過去—

」・重松泰雄『文学』昭和五十五年十月号

註4 「硝子戸の中」——その〈微笑〉の意味するもの——」

・佐藤泰正「国文学」昭和四十四年四月、原題「漱石と神——その序説・『硝子戸の中』をめぐつて——」のち

『文学 その内なる神』(1974年、楼楓社)所収

註5 註4に同じ

註6 註2に同じ

註4 註4に同じ